

高山の文化を高めた人々 〈7〉

飛驒の詩人 吉村比呂詩

和仁 市太郎

昭和八年の春、神岡から市内朝日町に移住してくると、道路一つ距てて吉村比呂詩の家で、その以前から名前だけは知りあっていたので意気投合した。その年の九月、佐藤惣之助の「詩の家」から出版された「白い人形」の奥付には清見村牧ヶ洞となっているが、城山公園の如意ヶ丘に完成した名作「飛驒山娘」の詩碑落成式に配布された長尾量平の装釘の建設記念詩の解説書に夫人の加須江さんが、「飛驒山娘」は清見村教師時代（二十五歳）の作品です。」と記していら

れる。二年後の十年六月には第二詩集「雪線に描く」もやはり牧ヶ洞時代の作品で、同詩集のATOGAKIに「私は此の頃童謡を、其れも主に作曲振付向のものを書いて



居ります。私の第三詩集はきつと「童謡集」となつて出るでせう。」と書かれていますが、この二著をさかいに現代詩から遠ざかつてゆかれる。いま比呂詩の作品論を書くのではないが「白い人形」や「雪線に描く」のような現代詩を陸続と書かれていたら、名作「飛驒山娘」が生れて

いたかどうかと思われる。

比呂詩の略歴を簡単に紹介すると本名は吉村廣吉、明治四十一年八月高山に生れる。大正十五年三月、斐太中学校卒業。昭和二年三月、岐阜県教員養生所卒業、と同時に吉城郡坂上小学校奉職、つづいて大野郡福寄、夏廐、牧ヶ洞、古川町小学校と比較的僻地を廻り最後に市内の東小学校へと落ちつくのであったが、東校に通勤するようになると、「茨の花」をガリ版で手刷りした未発表作品を届けてくれ散逸もしたが今も手もとに古川時代の葉書や道路一つ距てた自宅からの葉書も数枚あり、その点筆まめで几帳面な比呂詩であった。二十一年三月東小学校を退職すると「茨の花」を主宰し夕咲と比呂詩の作品を多く載せた。かたわら「飛驒新聞」の主幹として論陣をはり活躍し、歿後のその夏、僅か二年後の間に遺稿集となった歌謡詩、童詩集「たけぶえ」は実に四百九十余編を収めた驚異に値する著作で、恐らく教員退職後二十年間の業績であり飛驒からはこれらの著作を凌ぐ詩謡集は現れないと思

う。

前述したように昭和の初期時代は上島禪逸の飛驒毎日新聞紙上に夕咲の推奨で短歌、詩作品を発表する。文芸のみならず酒の上でも夕咲の愛弟子であった。昭和初期から詩人佐藤惣之助の「硝子の家」の同人として活躍、惣之助も飛驒入りして比呂詩の家に泊っている。歌人としても「裸形」「飛驒短歌」に同人として断続的ではあるが佳品を発表されてきた。

しかし比呂詩は戦中戦後を通じてラジオ歌謡の勃興期に遭遇するや芸大の松本民之助教授やその他全国音統連の作曲家により作品の数多くを電波に乗せ全国に放送された。中でもNHKのラジオ歌謡「山の静かな水音」はヒット作品となった。特記したいのは昭和十三年十一月十四日、市内の国技館に於て高山音楽連盟が伴奏、山下笛朗が指揮し当時女流音楽家の最高峰・三浦環の出演によって「飛驒山娘」を唱われたことで、破天荒な夢のような現実、作曲の笛朗や比呂詩の光栄、郷土の音楽史上、稀有のことであった。

なお飛驒の小、中学校の校歌の作詞もおびただしい数にのぼっている。まだ若く郷党の人たちに惜しまれ、昭和四十二年一月十日長逝された。享年五十八歳だった。（敬称略）